
命廻天意 ～使いの背反～ 改訂版

リオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

命廻天意　　く使いの背反く　改訂版

【Nコード】

N4670B

【作者名】

リオ

【あらすじ】

愛故に墮落した天使。一途過ぎる愛は世界を滅びへと導いた。※改良版になります但内容は同じです。

（前書き）

こちらはテーマ『命』で書き上げた作品の改良版になります。失ったものを何か取り戻せるかもしれないと思い再度投稿しました。何か感じて頂ければ、お言葉をお寄せ下さると嬉しいです。

神の七日間に渡る天地創造。まだ無に近い状態であった一日目に、私達天使は生まれた。

神が無より創造された世界は、火・水・風・土の四つの元素エレメントで成り立っており、万物はこの四つの元素によって規定され、物質と精神のあらゆる状態はこの基本となる四元素で表すことができるという。その中の一つ、私達は火より生まれ出た。

もう一つ土から創られたもの。それは、人間という生体物質である。

人間は男と女に別れ、制限付きの命が与えられ、繁殖の能力と生きる術を持った。

私達は母なる神のような永遠の存在ではないが、人間の魂のように不死のものである。天使も人間の魂も、不滅の物質から構成されている。

私達天使は全ての創造物の始源であり、神の光輝より流出したのだ――。

神は光の屈折が生み出す空間に手を伸ばし、その中に漂う第五の元素である、エーテルという原質によって構成された霊体の私を掴み取り、実体を作り上げて下さった。

身体を与えられたと同時に、私はアゼルという名を頂いた。そして、地上の人間を見張る役目を負った“グリゴリ”と呼ばれる者達の指導者に就任することになったのだ。

「ガドリール、日々増えて行く人間達の繁殖能力とは凄いものだな」「これはアゼル様。繁殖と生きる術の能力しか与えられていないのですから、当然ではないでしょうか」

遙か遠い地上では、人間達の生と死が繰り返されている。彼等が気付くことの出来ない、気の遠くなりそうな程に離れた天上世界で、私達グリゴリはそれを常に眺め続けることを使命としていた。

このガドリールは、私の補佐的立場である。

「同じことの繰り返しでつまらないな」

「同感ですね。しかし私は一つ楽しみを見付けました」

地上から目を離さないままのガドリールの瞳は、柔らかく細められる。彼の唇に浮かぶ微笑に、さも楽しいことなのだろう、と私の興味はそそられた。

「それは何だ。私にも教えてくれ」

「見ていて分かりませぬか」

——見ていて、とは人間のことか？

私は詳細を語らぬガドリールを不満げに一眼し、ゆっくりと地上へ視線を移す。そこには、いつもと何等変わらぬ人間達の姿が在るだけだ。

「分からぬ」

そう唸るように声を発した私に驚いたのか、ガドリールはやつとこちらを向いた。一度肩を竦めた彼は、地上を指差し

「女ですよ」

と、再び私から人間へと視線を戻す。

「女だと」

人間の片方の種類を表す単語。私は疑問に眉を顰めた。

女の何が楽しいのか、私は見極めようと地上へ目を遣った。地を耕す屈強な男を視界の片隅に、種類の違いはこれほどか、と思わせる柔らかな曲線の身体を持つ女を見付けた。

普段何気なく見ていたものを、私は初めて深く観察したのではないだろうか。何故なら、その一瞬で魅了されたからだ。

私の見付けた一人の女。こ高い丘にぽつんと生える樹木の根に座り、栗色の長い髪は風に溶けて。大きな瞳は陽の彩を受け煌めき、花のような唇は可憐な歌声を生み出していた。

「どうですか？ 女とは美しい存在でしょう。特に娘は素晴らしい」
熱っぽい眼差しを地上へと送るガドリールの瞳。私はそれに感染してしまったのか、見付けた女――美しい娘から――目が放せない。
「これで、つまらないという問題は解決されたでしょう？」

「ああ。そうだな……」

――あの娘を見ていたい。ずっと。

私は気のない返事を返す。瞬くことも出来ず、興奮にも似た感情に混乱しつつも抗えずに。ただ一人の娘だけを、延々と見続けた。

来る日も来る日も、私はあの娘の姿だけを追っていた。人間達の監視は、二百余り存在するグリゴリの部下達に任せきりだ。

使命を放棄しているようなものだ、そのような神に背く真似は許されないと分かっている。だが抗えないのだ、この衝動に。私を突き動かす、胸を焦がす炎に。

これは何なのだ。もどかしい想いが、私を支配して行く感覚。美しい娘が花よりも可憐に笑い、月よりも神秘的に愁う度、私の感情の器から何かが溢れ出す。

使命に支障をきたす感情は邪魔だ。しかし何よりも心地良いこの感覚は、私を着実に蝕んでいる。

この病。ついには、グリゴリ全てに広がりを見せて行った。それぞれが娘達に魅了され、使命の言葉など記憶の欠片にすら在るのかどうか。

地上を夢中に見つめるグリゴリ達は生き生きとしているが、瞳に映すは監視には程遠いものばかり。

気付けばついに我々は使命を忘れ、のめり込むように美しい花々を愛でていた。

「遠く離れた世界とは、何と恨めしいものだろうか」
手を伸ばしても届くはずのない世界へ、私は何度それを試しただ

ろう。

——この手で、触れたい。

だがそれは、叶わぬ夢。望んではならないこと。

使命という名の隔たりが、この想いを尚も恋しく膨脹させているのだろうか。

雲の垣間に見える、水蒸気の鏡に映し出された私の顔は、酷く情けなかった。

「なんて顔だ。そんなにも、あの娘が愛しいか」

水鏡の己に語りかけると、胸の奥底から沸き上がる熱が応えてくる。焦がすようにちりちりと痛む胸、そこに全神経が集中するようだった。

——痛い。辛い。

あの娘が居着いた心。必死の抵抗を見せなければ、刹那の内に堕ちてしまいそうだ。

「アゼル様」

苦痛と葛藤に飲み込まれそうな時、我が名を呼ぶ声が背中を叩く。

「ガドリール……」

振り向いた私と視線が交わった途端、ガドリールはきよとん、といったふうに目を丸くした。しかしその目は直ぐに細められ、彼は吐息のような笑い声を漏らした。

「そのような顔をなされる程、人間の娘が恋しいのですか」

「な、何を馬鹿なことを。私は……」

そんな愚かな幻想など抱いてはいない。と、その言葉が私の口から出てくれない。どんな弁明をしようとも、偽りとなる言葉は力を成さないのだ。陳腐な言い訳など、知に長けた彼には通じぬだろう。表情を苦に歪ませ、下唇をきつく噛み締めた私の肩に、ガドリールの手がやんわりと触れた。

「私も同じですよ」

彼の瞳が、切なさに揺れる。私と変わらぬ想いに苦しむ姿。我々グリゴリは一人も逃れることが出来ずに、夢や幻想の高波に飲まれ、

その中で惨めにもがいていたのだ。

「私は、地上に降りようと思います。同じ想いに苦しむ者達を連れて。アゼル様も、共に行きましょう」

——神よ……。

私が彼御方^{かの}を尊んだのは、それが最後だった。

風が、変わる。上に居た時は感じられなかった地上の匂い。

神聖なキンとした空気が柔らかく解れ、この身を縛るようだった緊張感が消えて行く。けれど微かに清浄さを欠く世界は、背に在る純白の翼を穢れに染めて行った。

地上に降り立った我々グリゴリは、各々が目当ての花へと散り散りになる。ガドリールもまた、直ぐに私の前から姿を消した。

私も両の翼を広げ、大空を舞った。ハラハラと幾つかの羽根を降らせ、焦る心を宥めながら、あの娘の元へ急いだ。

天上で気の遠くなる程に眺め続けていたのだから、居場所は解している。きつと今は視界に映り始めた、あの樹木の聳える丘に。

——嗚呼、見付けた。しかし、突然現れた私を娘は何と思うだろう。

この世界に存在する、どんな金銀財宝も敵わぬだろう美しい娘。その柔らかに靡く髪の一筋一筋が、空で躊躇う私を誘う。

その時、突風が私の羽根を掠った。雪のように舞いながら、娘へと降り落ちて行く。鳥のそれよりも遥か大きな羽根を掴み、娘は驚いたように空を仰いだ。

「あ……貴方は……？」

いつも精神で感じ取っていた娘の声が、直接耳の奥に響く。湧き出る泉よりも澄み切った声音。

——もつと近くで聞きたい。

その一瞬で躊躇いを忘れ、得体の知れぬ者を見開いた瞳で見つめる娘へと、吸い込まれるように私は舞い降りて行った。

「まあ、なんて麗しいのでしょうか」

私の姿を間近に捕らえた娘は、両の指を唇の前で絡ませ、うつとりと頬を染めた。

私達の造りは、人間の男と同じ。だが線は細く、全てにおいて神聖な物質で構成されている容姿は輝いた。しかし私は、人間から見れば異形種だ。この美しい娘に、受け入れて貰える自信など無かったのだが――。

「娘、名は？」

「シスと申します」

私がゆつくりと近付くも、シスは警戒するそぶりを見せない。それどころかその滑らかに細い足は、緑の芝生を踏み締めながら私へと歩み寄って来る。

「私は、アゼル」

求めるように、腕を伸ばした。拒まぬシスの頬に触れ、吸い付くような肌の潤いに歓喜する。

頭一つ分は身の丈が高い私を見上げるシス。その表情には見覚えがあった。水鏡に映った、恋しさに愁いでいた私の表情とよく似ている。

これは、運命という名の神のお導きだろうか。使命に背いた私へ、それは有り得ないことだろうけれど。シスの愛しい顔を見ると、そうとは思えなくなる私はご都合主義なのか。

「お前を欲し、私は今、ここに居る」

「きつと私が今ここに居るのも、貴方に会う為だったのです」

神には及ばぬが、まるで奇跡の如く。私達は共に惹かれ合い、そして、深い愛の渦へと巻き込まれていった――。

愛しい、愛しいシスよ。私にはお前さえ居れば良い。他には何も望まぬ。

――永遠にお前と共に。それが私の唯一の願いだ。

「アゼル、見て。どうかしら」

「とても美しいよ」

シスはもとより何物にも劣らぬ美貌を持っていたが、それに気付かず私を見ては落ち込むことがあった。少しでも自信を持ってくれたら、と私はシスに容姿を装飾する化粧を教えたのだ。

人間に何かを教えるということを神は禁じておられたが、天界から降りた私には無関係だ。

他にも、異形の者故にされる警戒を解く為、男達に剣や楯などの武具、金属の指輪などの装飾品を構成する知識を与えて行った。

私が与えた覚えのない知識——文字の読み書きや、天文から操る占星術など、神に近い存在、つまり地上では我々グリゴリでしか知り得ない業——を持つ人間が現れ始めたのは、他のグリゴリ達も私と同様に上手くいっている証だろう。

「アゼル。私、子供が出来たわ」

「嗚呼……お前はなんて素晴らしいのだ」

幸多き日々が続く。最愛のシスと、その中に宿った小さな命。この至福の夢は、永久に覚めること^{とわ}はない。私は、そう信じていた。

しかし、武器を持った男達は戦い争うことを覚え、女達は派手に装い男に媚びを売ることを覚えて行った。

領土だなんだと男達の戦は絶えず、女達は生きる為、または快樂を得る為にその身を様々に穢した。

今まででは有り得なかった殺戮の数々。私達の与えた知識により自然と現れた商い。それによる財産を巡る争い。清々しく真っ白だった娘達の身売り。

平和だった地上が、次第に壊れて行く。だが荒廃は、それだけの為ではなかった。

「アゼル、エルヒムが居ないの。目を離した隙にあの子ったら」

「他の子らも姿を消したらしい」

グリゴリと人間の娘の間に生まれた子は全て、私達とは似ても似つかぬ恐ろしく醜い、巨人の化け物だった。産まれたばかりの時は玉のように愛らしい子だったが、時を重ねるうちに目を疑う成長を見せ、心が芽生えた瞬間から、無垢な表情はそれを反映し歪み始めた。

種の違う掛け合わせが生んだ悲劇か、姿形を形成する遺伝子の狂い。それは乱れることなく全てが狂暴化し、私達は監視を強め拘束していた。だが一瞬の隙をつき、子供達は自由の世界へ解き放たれてしまったのだ。

「アゼル様！ 何とか食い止めなければ」

ガドリールの悲愴な叫びに導かれ、私は子供達を鎮めるべく空に飛び立った。上から見た地上の荒廃は、狂気に暴走するグリゴリの子供達によって見る見るうちに進んで行く。

「エルヒム！」

父である私の声も届かない程、彼等の人格や理性といったものは既に消滅してしまったのだろう。

私達グリゴリはこの凶行を抑える為、持てる力の全てを注いだ。天使の身に宿るエネルギーの集合体は背に在る翼。それが散り行くまで力を放出し続けたが、食い止めるまでには至らなかった。

子供達は地上の作物はおろか、鳥や獣、人間までも食い尽くして行く。母であるシスさえも、エルヒムは躊躇うことなくその巨大な口へ運び噛み砕いた。

愛する息子の為、シスは必死に祈り続けていたけれど。その最後の瞬間、彼女は空の私を見つめながら、儚く散った。

遂には巨人同士での共食いまで始め、エルヒムは橙色の肉片に姿を変え、他の子らも同様に滅び、地上は真紅の荒野と化した。

「エルヒム……シス……！」

地上に広がる紅は絶望の色。こんな光景は、現実にあってはならないもの。

私の夢の宝物達は、悲惨な最後を遂げた。

——悪夢なら、覚めてくれ……。私の夢は、こんな残酷なものではなかった。

何もかもが機能しない程の喪失感に指の一本さえ動かすことが出来ない私の、最後の羽根が抜け落ちる。私の瞳から零れる悲しみと共に空を舞う。

力を失い、私は重力に身を任せ堕ちて行く。愛を捧げた、私の全てを尽くした地上へと。

至福の夢は覚めてしまったのだ。あの時出会い惹かれ合った奇跡の運命は、もう、存在しない——。

荒野の中、私は倒れ込むように一人取り残されていた。残酷な世界が広がる地上は、まるで紅いマグマが覆い尽くしているような悪夢の住家だ。

心は碎け散り、無意識の涙がとめどなく溢れる。そんな私に影がさし、気怠く視線を向けると、私など比にならない翼の質量を誇る四大天使が一人、ラファエル様の御姿がそこには在った。

「全地はアゼルのわざの教えで墮落した。統率者である奴に一切の罪を帰せよ、との神の御言葉だ。これより大洪水を起こし、救えぬ地上を滅ぼす」

——もう、どうでも良いことだ。だが……。

抗う力など、とうに失った私はラファエル様の手によりデューダルの洞窟と呼ばれる荒野の穴の中に投げ込まれ、一点の光も射さない闇の世界に閉じこめられた。

私は朽ちる時まで、この闇の中だろう。外の世界のことなど、何も分からない。己の位置、手や足の感覚さえも闇に溶けて行く。

唯一求めた花を失い、同時に未来へと続く夢をなくした私には、もう、どうでも良いことだ。だが一つ、最後の願いが聞き届けられるのならば。

——魂が廻り命となるのならば、私の身体が尽きた時、次の命に

生まれた時は、またシスに出会いたい。そしてエルヒムもずっと愛らしいまま、私達家族は幸せな日々を……。

神に背いた私の、身勝手な願い。全ての罪を被った私なのだから、叶えてくれても良いだろう。

愛故に背反し、愛に生きた私には、その願いが全てだ。

シス、エルヒム。私はお前達の為だけに存在した。この深い愛は、不滅の魂と共に生き続けるだろう。

ここは正に無の世界。己の存在さえも失う闇の空間では、何もすべきことはない。私は最後が訪れる長い時の中で降された罪に包まれながら、それだけを神へ祈り、永久の夢を抱いて眠るだけだ――。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4670b/>

命廻天意 ～使いの背反～ 改訂版

2010年10月8日14時27分発行